

## 日本計算工学会論文集原稿執筆要領\*

### Instructions for authoring manuscripts for Transactions of the Japan Society for Computational Engineering and Science

数尾 学<sup>1</sup>, 日本計一<sup>2</sup>, 計算工太郎<sup>3</sup>

Manabu KAZUO, Keiichi NIPPON and Kohtaro KEISAN

<sup>1</sup> 計算大学工学部計算工学科 (〒123-1234 東京都港区芝 1234-56-7)

<sup>2</sup> 数値大学理工学部数理工学科 (〒100-1234 東京都千代田区本郷 1-2-3)

<sup>3</sup> 計算大学工学部計算学科 (〒199-9999 東京都新宿区神楽坂 1-7)

Transactions of the Japan Society for Computational Engineering and Science, abbreviated as Transactions of JSCES, is published through internet in PDF (Portable Document Format) style. All manuscripts should be in Japanese or English. Please follow the instructions of this guideline strictly with regard to the placement and size of the title, authors' names and their affiliations as well as the main text style. The length of the manuscript should be less than or equal to six pages. Every excess page will be charged in addition to the basic charge.

**Key Words:** JSCES, Internet, World Wide Web, Portable Document Format, Computational Mechanics

#### 1. 緒言

この文書では、日本計算工学会論文集(印刷形式およびインターネット論文集)への投稿論文を作成するための執筆要領を、実際の論文の形式に従って説明します。つまりこの文書自体が実際の論文の形式で作成されています。また、印刷論文とインターネット論文集の共通の執筆要領です。著者は、この文書を十分参考にして論文を作成して下さい。

#### 2. ファイル形式

本論文集では、著者がワープロ、TeXなどで作成したカメラレディの原稿を投稿システム上でPDF形式に変換し、その原稿のPDF形式のファイルをインターネット上に公開します。PDFとはPortable Document Formatの略で、Adobe Acrobat Readerで閲覧可能なドキュメントの形式です。

#### 3. 原稿の形式

**3.1 使用言語** 使用する言語は日本語または英語に限ります。

**3.2 原稿のサイズと長さ** 原稿サイズと形式は

A4サイズ(210×297mm)の縦置き、余白は上20mm、下20mm、左20mm、右20mmの2段組とし、段間隔を10mm取って下さい。原稿の長さは原則として6ページ以内とします。6ページを越える長さの論文は超過する頁ごとに別途料金を申し受けます。

**3.3 本文の体裁** 論文のタイトルに使用する文字は和文の場合中ゴシック体14ポイント、タイトルの英訳はTimes RomanまたはComputer Modern体のボールドスタイル12ポイントとします。ただし英文論文の場合は、同じフォントで14ポイントとして下さい。著者、著者の所属は明朝体の12ポイント、著者の英訳はTimes RomanまたはComputer Modern体の12ポイントとします。本文の説明に使用する文字は本文のフォントは明朝体9ポイント、英文のフォントはTimes RomanまたはComputer Modern体の9ポイントとします。脚注は明朝体(英文はTimes RomanまたはComputer Modern体)で、7ポイントとして下さい。なお、句読点は“,”および“.”を使用して下さい。

**3.4 英文アブストラクト** この例に示すように論文の内容・重要な点を簡潔に表現する100~150語からなる英文アブストラクトを作成して下さい。アブストラクトの後ろには5~8語のキーワードをつけて下さい。

**3.5 論文番号と1ページ目の脚注** 論文番号と1ページ目の脚注は、論文投稿時には空けておいて下さい。論文掲載決定後にこれらの情報を通知しますので、著者が論文に直接記入して作成した原稿を再提出

\* 原稿受付 1997年6月1日, 改訂 1997年7月30日, 発行 1997年8月3日. ©1997 日本計算工学会.

Manuscript received, June 1, 1997; final revision, July 30, 1997; published, August 3, 1997. Copyright ©1997 by the Japan Society for Computational Engineering and Science.

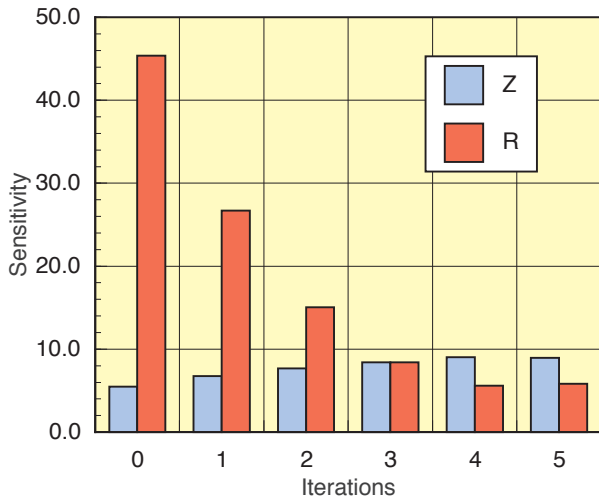


Fig.1 This is an example figure layout. A long caption must be hanged like this example.

していただきます。記入のスタイルは、この見本に従ってください。

#### 4. 見出し

4.1 節の見出し 見出しのレベルは2段階とし、第1レベル(節)は、上の例のように上下を1行ずつ開け、12ポイントの大きさのゴシック体の文字を用いて記入して下さい。

4.2 項の見出し 第2レベル(項)の見出しは、この例のように9ポイントの大きさのゴシック体の文字を用い、見出しの上下の行は空けないで続けて本文を記入して下さい。

#### 5. 文献引用

5.1 文献引用 本文中で文献を引用する場合は、通し番号とし、山田・佐藤<sup>(1)</sup>, Yamada and Sato<sup>(1)~(3)</sup>, 3人以上は山田ら<sup>(4)</sup>, Yamada et al.<sup>(5)</sup>を用いて下さい。

5.2 文献リスト 論文の末尾にまとめて引用順に番号付けして記入して下さい。文献リストのフォーマットは、この見本の末尾を参考にして下さい。共著者がいる場合は、全員記し(et al.を使わない)論文題目も記入して下さい。また、外国語の出版物名は斜体、巻の通し番号は太字にして下さい。

#### 6. 数式

本文の間に式を記入する場合には式の上下に半行空行を設けて下さい。式は中央揃え(センタリング)にして下記の例のように右端に通し番号をふって下さい。

$$\sigma_{rr} = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{\exp(-\alpha_n^2 kt)}{\alpha_n a J_1(\alpha_n a)} \left( \frac{J_1(\alpha_n r)}{\alpha_n r} - \frac{J_1(\alpha_n a)}{\alpha_n a} \right) \quad (1)$$

Table 1 This is an example table layout. A long caption must be hanged like this example.

Errors of $\theta$ [%]		
Initial	Second	Third
23.5	11.3	22.4

$$\begin{aligned} \sigma_{xx} + \sigma_{zz} &= \frac{P\alpha_1^2(1 - \frac{1}{2}\alpha_2^2)}{2\pi G_2} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-|\xi|z\gamma_1 - i\xi X} d\xi \\ &= \frac{P\alpha_1^2(1 - \frac{1}{2}\alpha_2^2)\gamma_1 z}{\pi G_2(X^2 + \gamma_1^2 z^2)} \quad (2) \end{aligned}$$

#### 7. 図表

図表は、本文で引用した個所に近い場所に中央揃えで置くことを原則とします。白黒以外の表を使用した図の掲載も認めますが、計算工学講演会の開催に合わせて印刷出版する形式の論文集に収録する場合は白黒の印刷となります。図のキャプションは図の下に、表のキャプションは表の上に、それぞれ次の例のように英語で記入して下さい。また、図表中の説明もすべて英語を用いて下さい。図番号、表番号は通し番号とし、それらを文中で引用するときにも、Fig.1やTable 1のように引用し、図1や表1のようには引用しないで下さい。

#### 8. その他

謝辞は結論の直後に、付録は参考文献の直前に記入して下さい。

#### 参考文献

- (1) Timoshenko, S. P. and Goodier, J.N., *Theory of Elasticity*, 3rd edn., McGraw-Hill, Auckland, 1970.
- (2) Goodness, O.M. and Who, A.I., Convergence property of new second-order finite difference scheme, in *Recent Advances in Finite Difference Methods*, Chapter 6, ed. A. Einstein, Funny Press, Tokyo, 1989, pp. 192-206.
- (3) 数尾学, 計算楽太郎, 佐文欣二, 移流拡散問題の大規模高精度解析法, 日本計算工学会論文集, 11, 1996, Paper No.19960003, pp. 335-348.
- (4) 鈴木太郎, 佐藤健志, 非定常動弾性問題の有限要素法による解析結果の動画像表示, 日本機械学会論文集, A編, 33-321, pp. 2186-2193, 1991.
- (5) Hockney, R.W., The computer simulation of anomalous plasma diffusion and the numerical solution of Poisson's equation, PhD Thesis, Stanford University, 1966.

- (6) Alverson, R., Callahan, D., Cummings, D., Koblenz, B., Porterfield, A., and Smith, B., The TERA computer system, *Proc. of the Int. Conf. on Supercomputing*, New York: ACM, June 1990, pp. 1-6.
- (7) 計算楽太郎, 遺伝的アルゴリズムを用いたニューラルネットワークの設計, 計算工学会講演論文集, Vol.2, No.3, 1995, pp. 245-248.
- (8) Griewank, A., Achieving logarithmic growth of temporal and spatial complexity in reverse automatic differentiation, *Optimization Methods and Software*, 1-1, 1992, pp. 24-35.